

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「毎日の暮らしの中でその人らしい生き方を見つけ出していただくと共に、ここで暮らすことが人生の中で一番幸せと感じていただけるような家庭的なホームを目指します」との理念をつくり上げている。	設立当初に立てられた長文の理念から分かり易い簡明な理念に変更している。法人の理事長からも折にふれ理念についての話があり、日々の実践につなげるため職員は全体会議や朝・夕の申し送り時に理念を唱和している。来訪者にも分るように、玄関や多目的室に掲示している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	お花見、お祭り、どんど焼きなどの地区の行事に参加している。また中野小学校、高丘小学校とは運動会や文化祭等に参加し交流している。バーベキュー大会を開催し近所に開放している。近所の人は野菜やくだものを気軽に持ってきてくれる。	地元地区に協力費を支払っており、地区のお花見や文化祭にも参加している。また、近くの小学校の音楽会等にも招待を受け交流している。中学生の職場体験学習の受け入れもしている。ホーム周辺の散歩時に親しくなった地区の人と話しをしたり、野菜などをいただくこともある。ハーモニカや踊りのボランティアなどの来訪も月に1回ほどある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	全体会議にて、職員一同で話し合いをしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	ホームの近況報告や話し合いをしている。家族代表、行政、地域包括、理事長、管理者、計画担当がメンバーとして参加している。地域密着型サービス、看取り、GH改正消防法等について話し合われている。	家族の代表、区長、民生委員、市担当部署職員、地域包括支援センター職員、法人理事長、職員が参加し開催されている。回数は年2回程度となっている。内容は活動報告や課題、外部評価結果等となっている。出席した委員からも建設的な意見が寄せられている。	委員の方の諸事情により開催が難しい場合があると思われるが、全委員の出席でなくても、議題について事前に書面等で意見・提案・要望等をしていただき、2ヶ月に1回の開催ができるよう調整していただきたい。内容によっては委員以外の関係者の協力や参加を得られても良いのではないだろうか。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者や日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市担当者や包括支援センターとは生活保護、独居家族の支援について具体的な連絡を取り合い、相談、報告している。	市召集の「保健・医療・福祉事例検討会」が毎月第3火曜日に開催されており、意見や情報交換の場となっている。検討会の後、同日にケアマネジャーの会議がありホームからも参加している。市から委託を受けている介護相談員が三ヶ月に1回訪れており入居者と接している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	日中は施錠はせず、チャイムや見守りによるケアを実践している。夜については家族の了解を得て、利用者の安全を確保する必要がある場合は施錠する場合がある。	現状拘束を必要とする入居者は全くいない。夜間、入居前の長年の習慣から安心のために自室の鍵を中からかける方がいるが、家族からも了解をいただき安否確認時に外から開錠できるようにしている。外出傾向の入居者は現在いないが、万が一の場合に備え区の役員の方には協力をお願いしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	全体会議で、勉強会を開き職員も理解している。		

ヒューマンヘリテージ安源寺

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	全体会議で、勉強会を開き職員も理解している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用契約時には文書で示し、口頭で説明する。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	市の介護相談員を受け入れている。	入居者からの要望は日々の支援の中で聴いている。家族からはホームへの来訪時に気軽に言ってもらえるよう働きかけている。家族会がバーベキュー大会を兼ね毎年8月に開催されており意見・要望等を聴く機会となっている。遠方から縁者が3～4人でかけつけ、多目的室を使い昼食を食べ、職員ともコミュニケーションをとっていくこともある。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月一度の全体会議を行い意見や提案を聞く機会を設けている。	毎月1回、法人の理事長も参加し全体会議が開かれている。内容は理事長の講話やその時点での課題、ケース検討、モニタリング等となっている。会議は双方向の言いやすい雰囲気、議題以外の多岐にわたる分野へと発展することもある。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	常に、労働時間と仕事内容を把握し外部類似施設の給与水準と比較しバランスをとっている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	定期的に施設の理念を確認し、職員の毎日のケアの中においても職員の力量に合った自己実現がされているか確認している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	長野県宅老所・グループホーム連絡会を中心ネットワークを結び、定期的に他ホームとの職員交流を行い、職員とサービスの質の向上確認をしている。		

ヒューマンヘリテージ安源寺

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ご利用前から本人・家族と面接し、希望・要望を確認し、できるだけ意向に添えるよう取り組んでいる。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	どんなことでも、相談していただくようにお伝えしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人の意思を確認し、その方にあったサービス利用を紹介したり相談にのっている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	昔の生活経験、習慣を尊重し、それを活かして過ごす事が出来るよう努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人の希望や昔からの趣味、特技をいかしていただけるよう家族と一緒に話し合い、ここで楽しく毎日を送っていただけるよう考えている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人が希望した場合、行きたい場所には、お連れしている(自宅、店)面会、電話のとりつき、面会の場所を作り開放的にしている。	約半数の入居者については職員が同伴し、自宅付近やなじみの買い物先などへ出向くことがある。自宅の近くの知人が頻繁に会いにくる入居者もいる。知人や友人などが来訪した時に、水入らずで話せるように多目的室を利用していただき湯茶等の提供もしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	職員が中に入り、雰囲気作り、仲間作りができるよう支援している。		

ヒューマンヘリテージ安源寺

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居後も家族の方・本人が訪問しやすいように努めている。退居後もその後の状況把握に努めるように連絡をとりあっている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	できる限り、一人ひとりの思いや意向について関心を払い、把握するよう意見を出し合い、話し合っている。	殆どの入居者が日常生活上の意向について言葉として表すことができる。各入居者に職員の担当制を布いており、各入居者の希望等を全体会議で発表し共有化を図っている。朝の申し送り時にも前日や前夜の入居者の状態を伝え、その日の支援方法を話し合っている。夜勤の職員が1対1で入居者と接し色々な思いを聴くこともある。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人の希望を聞いている。出来る限り今まで通りの生活が出来るように努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	見守り、観察を行っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人、家族の希望、意向を尊重しながら、より良い生活ができるよう検討している。	家族の来訪時に相談し、計画作成担当者が立て、担当職員に意見を求めている。出来上がった計画は家族に説明し認印をいただいている。介護計画は三ヶ月に一度見直しをしており、状態に変化があった時には即見直しをしている。最近の1年間は急変等の場合で変更することはなかった。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別の記録は必ず日誌に書くようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その時のニーズに応じ、柔軟な支援を臨機応変に行っている。		

ヒューマンヘリテージ安源寺

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域区長、民生委員、介護相談員等に協力を得て、ホーム内では対応できない事項等の支援を頂いている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人、家族と相談し、かかりつけ医等受診している。	基本的には入居前のかかりつけ医を継続している。家族の了承を得て市内の協力医に変更する場合もある。専門科目の医療機関への通院介助の際には家族等に事前に連絡し、結果も同伴の職員が知らせている。間もなく2ユニット目が開所することから訪問看護を導入する予定がある。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	必要な場合には市の保健師、栄養士に相談している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病院関係者と相談、情報交換している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	全体会議で終末ケア等について職員全員で話し合っている。状態により早いうちに家族、主治医と話し合いを行っている。	重度化や終末期にむけての指針の策定については理事長を中心に検討している。ホームで直接看取りをしたことはないが、直前までホームで過ごし、自宅へ帰られたり入院後に旅立たれた方は開設後6年間で5人に上る。現在事業所が提供できる最大限の支援方法で対処している。	今現在検討されている「重度化や終末期にむけての指針」の策定については協力医療機関などの関係者も交え十分詰めていただければと思う。2ユニット目も増設されることから、入居者の高齢化、重度化が更に予測されることから、本人や家族の要望に可能な限り応えられる態勢を整えていただきたい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変、事故発生時について慌てず対応できるよう会議で話し合っている。職員全員が応急手当等の訓練を、これからは定期的に行っていきたい。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防署の方、近所の方に来ていただき、昼、夜の避難訓練を行っている。近所の方に協力をお願いし、承知していただいている。	夜間想定も含め年2回避難訓練を実施している。地元地区からの意見をいただき、近所の方がわかるように駐車場に回転非常灯を備え万が一の協力も得られるようにしている。入居者も参加しており、職員が布団の上に乗せ訓練したこともある。自動火災報知器は設置されており、スプリンクラーの取り付け工事も進行中であった。	

ヒューマンヘリテージ安源寺

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉かけや対応、記録等には一人ひとりの気持ちを大切にしている。	入居者の尊厳やプライバシー保護については事業所内で研修している。入居者への呼びかけは希望があれば家族として受入れられような「おばあちゃん」、「おじいちゃん」などを使用することもある。職員採用時も説明しているが、採用後3ヶ月間は試用期間を設け適性を見極めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の思いや希望に添って納得しながら暮らしていただく。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一日の流れの中にも一人ひとりのペースを保てるようにしている。利用者に関わる時はゆったり優しく対応するよう心掛けている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人が望む時、望む店に行けるようにしている。訪問理容を受けている方もいる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	盛りつけや色あいに食欲をそそるような工夫をしている。 利用者の方に準備・片付けと一緒にやっていただいている職員と利用者は一緒に食事を摂る	入居者はジャガイモの皮むきなどの下ごしらえや配膳、下膳の手伝いを出来る範囲で行なっている。入居者全員が職員の介助なしに見守りだけで食べることができる。食事制限の対象者も数名おり、冷蔵庫の横に注意書きが貼られている。食事メニューは職員が考えており、いただきものの野菜などがふんだんに使われ、キザミやおかゆなどの形態にも配慮がされている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりに合わせて盛りつけ量や水分量を調整している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアの見守り、声かけ介助を行い、歯みがきのチェックをしている。		

ヒューマンヘリテージ安源寺

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	オムツをできる限り使用しないで済むように、排泄パターンを把握し、排泄の声がけ、誘導している。	各居室にトイレが完備されており、車椅子で入れるスペースがある。完全に自立できる入居者は数名でリハビリパンツやパットを使用する方もいる。各入居者の排泄パターンを把握しており、時間や食事量等で誘導のタイミングを図っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	野菜・海藻を多く摂取し、水分も多めに摂取していただき体を動かしていただくよう努めている。受診時に医師から便秘薬を処方されている方もいます。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴に声がけし、一人ひとりの希望やタイミングに合わせている。毎日の入浴もシャワーも可能である。仲の良い利用者同士で入浴されることもある。	最低でも週2回は入浴している。入居者には朝希望を聞き対応している。希望があれば毎日でも可能である。入浴介助が必要な方も約半数ほどいる。入浴を拒む場合は職員が交代で時間をずらして声がけするなど工夫している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりの気持ちに合わせた自由の生活を心がけている。昼間は身体を動かす事を支援し、夜間、良眠していただくように支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬局の処方箋をご利用者毎にまとめ一冊のファイルに綴り、付箋をつけて見やすいようにまとめている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの生活歴(趣味、職業等)を聞き、ここでの役割や楽しみごと等で活かしていただいている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	一人ひとりの希望に添って戸外に出かけるようにしている。(自宅、美容院、受診、銀行、買物等)	冬場を除きホーム周辺の田園地帯を散歩しており、買い物などの外出にも個別対応をしている。ホーム全体での行事外出も多く、近隣のバラ公園や温泉へと出向いている。ファミリーレストランや回転寿司などへの外食に出かけることもある。車椅子を使用する方も2~3人いるが、車に分乗して出かけている。	

ヒューマンヘリテージ安源寺

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	財布を個人で管理できる方には、希望や、力量に応じて支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話は取り次ぎ、かけたい希望がある場合には希望に添うよう対応している。居室に電話を設置されている方もいる。手紙が届くと本人に渡している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	オールバリアフリーで食堂、居間、廊下と柔らかな照明のもとで安全性に優れた家具を備えている。装飾は季節により変化し、手作りで楽しめる工夫をしている。	床暖房で快適な居間にはお雛さまが飾られ、春らしさが演出されていた。テレビやソファーも置かれ、入居者と職員がバンクーバー五輪の放映に一喜一憂し見入っていた。回転椅子が周りに置かれた食卓テーブルと調理台がすぐ側に配置されおり、入居者と職員が顔を合わせ話しながら調理ができる近い距離が保たれている。二階の多目的室が家族等の来訪時に使用されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居間にソファや廊下にベンチを置いたり、利用者同士でも楽しめる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れた家具、装飾品、電気製品等を自由に持ち込んでいただいている。こたつ等を楽しんだり自由な部屋作りをしていただいている。	全居室床暖房でトイレ、収納庫がついている。電話やFAXも備え付けることができ、持ち込まれている方もいる。フローリングの床に畳を敷いたり、馴染みのベッドやライティングデスクを置いたり、各入居者の穏やかな生活ぶりを窺うことができた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人ひとりの状態に応じて居室等にわかりやすい貼り紙をしたりして混乱しないよう工夫している。電気等の設備も本人が使いやすいように直している。		